施設の人間は言った。
「どうせ代わりのボディがあるんだから」
ササオは実験台の上で、動けなかった。ただ迫り来るスタッフを眺めていた。
スタッフは、ササオの体をごろりと転がして、うつ伏せにさせた。普通そんなことをすれば、実験台から転げ落ちるだろう。しかし、ササオは落ちなかった。実験の際に手足を切断されたから。切断された四肢の先は、雑な縫合がなされている。簡易的な血どめだ。何重にも太い糸で縫い付けられている。ただ、塞いだだけ、こんなの治療ではなかった。
肩から先がない分、実験台の幅には余裕があった。

中略

ササオの尻にも鋏で切り取られた残りの大腸が肛門から飛び出ていた。
スタッフはササオには興味を失ったらしく、そのまま実験室から出て行った。
ササオは、鋏で切り取られた大腸から血があふれ出すのを見ながら、痛みをごまかそうと、実験室の床を転がった。
ブチブチと肩の縫合が解けて、固まった血の間の奥から、固まっていない液状の濃い血がゆっくりと流れてくる。
大腸を切り取られた痛みをごまかそうと、縫合が解けるのもかまわずに、転がっていると、固まっていた血の部分が剥がれ、どくどくと血があふれてきた。
意識がもうろうとしてきた。動きまわったせいか、大腸が肛門からすっぽりと抜けたようで、実験室に転がっていた。ササオと同じ、物体。体から抜けきった大腸を目で認識すると、肛門からどろどろと血が流れてくるのがわかった。それは肛門のあたりで、止まった。小腸かもしれない。
そんなことを考えながら、ササオは目を閉じた。

冬夜は兄とセックスしている。しかも真夜中の病室で。兄は冬夜を抱き潰すといつもすぐに寝てしまう。もちろん病院のベッドの上で。
肛門が壊された。尻の割れ目からおびただしい血が流れては、シーツが吸い込み、吸いきれなくなった血がシーツからあふれて、兄が寝返りを打って身じろぎをするたびに、血は床にしたたり落ちる。
人工肛門になっているだろう。常人ならば。
冬夜は、寝ている兄の上に覆い被さった。今自宅に帰るより、ここから職場へ向かった方が何かと早い。個室の病室にはシャワーも着いているし、冬夜の着替えも置いてある。ほぼ二人の仮の家のようなものだ。
この関係性には病院の人間は誰も何も言わない。シーツの交換も、病室の掃除も病院の

スタッフがやっているはずなのに、何も言われたことがない。

　この世界には祝福がある。冬夜が物心をついた頃から、社会に浸透していた言葉だった。学校でも習う。しかし、この世界には祝福があるというには、冬夜が生きる世界は殺伐としていた。下層の犯罪率は高いし、中流も一日を生きるのに必死だし、上流は、人工的に祝福を授かる人間を作ろうとしていた。
　冬夜は目を覚ました。この病院の朝は早い。廊下からスタッフの足音が聞こえる。定期検査だろう。
　兄はまだ眠っていた。冬夜は全裸のまま、病院のベッドから降りて、シャワールームへ向かった。尻の傷は完全に癒えていた。冬夜には自己再生能力があった。
　仕事着に着替えて、シャワールームから病室に戻ると、兄が上半身を起こしていた。シャワーを入っているうちにスタッフが来たのか、血まみれのシーツは真っ白なシーツに取り替えられていた。床も綺麗に拭かれていた。
「おはよう。冬夜」
　肛門を破壊したこの兄は、何事もなかったかのように笑顔で挨拶をした。
「おはようございます。兄様」
「朝ご飯は？」
　兄はテーブルを出していて朝食に手をつけていた。
「移動しながら食べます」
　そう言って、冬夜は七階の窓から飛び降りた。不謹慎だろうか。兄も昔、同じ事をした。でも、冬夜が止めた。冬夜は複数能力保持者だった。サイコキネシス。日本語では念力と呼ばれる力だ。辞書的に説明するなら、科学的に証明されていない超能力の一種。静止した物体を動かすなど、術者が念じるだけで事物に物理的効果を与える現象だそうだ。
　自身にサイコキネシスをかけると、一般で言う「空を飛ぶ」状態になれる。冬夜は、ポケットから取り出した携帯食料を口に入れ、このまま職場へ向かった。
　冬夜は上層の人間だ。なぜか。親がそうだったからだ。では、その前は？　知らない。災厄が降ってくる前は、目に見えるような階層なんてなかったから。
　そんな上層の人間である冬夜が下層に向かっている。なぜ？　災厄は地面から沸いて出てくるから。

　　中略
　今もこうして、組織が命令することには逆らえない。
　知らない人間にペニスをしゃぶられても、文句も言えないし、拒絶もできない。
　感情とは裏腹にせり上がってくる生理的な快感を与えられて射精する。
　精液を飲み込んだ下層の人間は、床に頭をつけて何度もお礼を言って、カーテンの仕切りの外に出た。そしてすぐに次の下層の人間がやってくる。

「血液で」
　そう言われると冬夜はほっとする。上腕を紐で縛って、素人ながらに採血をする。200ミリ採れたところで止めた。
　採取した200ミリの血液を一気に飲んだ人間は、にっこり笑って出てっていた。
　息をつく暇もなく、次の人間が入ってくる。
　次の人間は、
「汗」
　と答えた。

　　中略

　病室に入ると、兄は顔を輝かせた。治っている。確実に。冬夜は服を脱ぎ全裸になる。兄も服を脱いで全裸になった。実験体にされたときから、羞恥心など捨て去った。あの頃は一般スタッフが監視する中で全裸でいろいろな実験をさせられたのだから。
「さあ、うつ伏せになって」
　兄の言うままに、兄が先ほどまで寝ていたベッドにうつ伏せになる。兄はその上から覆い被さるようにして、中に入ってきた。兄が腰を振るたび、背中に密着しているのを感じるたびに、兄を癒しているのがわかる。あと何回で完治するのだろう？
　昔、逆じゃない？　と言ったことがある。僕がヒーラーなのだから、僕が挿入する側じゃない？　と。そうしたら無言で挿入され、半死体にされた。

　　中略
　左右の拳で、顔を殴り続けると、原形をとどめなくなるほどに膨れ上がった。顎は割れ、口をだらしなく開け、舌を出している。もう冬夜は声も出さなくなった。ひゅーひゅーとだけ呼吸する音が聞こえる。晴れ上がっている顔からは、目が開いているのか閉じているのかさえ判別できない。
　歯はほとんど折れてベッドに散らばっていた。刺さると痛いので、落ちた歯をはたいてベッドの下に落とした。残っている歯も的確に拳を入れて折る。
　拳が歯に刺さったのを、もう片方の手で払う。わずかに血がついた。これは自分の血だ。ササオは舌打ちをして、顔が腫れ上がって埋もれている目をこじ開けて、目の中に指を入れた。
「がっあああああ」